内村鑑三における贖罪論

―山上の垂訓とコリント前書とヨハネ第一書を中心に―

渡部和隆

序

内村鑑三にとって贖罪は中心的なモチーフであるが、贖罪のみならず再臨や終末論も重視されており、両者の整合性が神学的に問題となる。この問題については古くは中沢洽樹の研究[1]、最近では李慶愛の研究[2]が挙げられる。中沢は内村の「仰瞻」という言葉が救済論的な含意をもつことに着目し、「仰瞻」の意味が拡充されて「仰ぎ見るキリストと共に生きる方向、義認から聖化への移行[3]」が生じたと言う。「義とは十字架のキリスト、聖とは昇天のキリスト、贖とは再臨のキリストであり、神はこのキリストにあって我らを義とし、我らを聖め、彼にあって我らに栄光を被せたもう。このすばらしい恩恵を受けるには、ただ十字架を仰ぎ、彼を信じさえすればよい、と内村は言う[4]」のであり、したがって「仰瞻のキリスト論は、内包的にはキリストとの合体、外延的には再臨による宇宙の完成と栄化に至る射程をもっている[5]」というわけである。李もまた、「十字架のイエス・キリストを仰ぎ瞻ることによって義とせられ、復活せるキリスト・イエスを仰ぎ瞻ることによって聖められ、再臨のキリストを仰ぎ瞻ることによって栄化される[6]」と、「仰瞻」の重要性について指摘し、『羅馬書之研究』の聖霊論と関係づけている[7]。李が指摘するのは、内村において義認、聖化、栄化は十字架のキリストを仰ぎ瞻ることによって与えられる恵みであり、三位一体に基礎づけられていることである[8]。李は『羅馬書之研究』で「父は上より、独子は側より、聖霊は下より働きて人の救は成る[9]」と書かれていることに着目し、「贖罪、復活、再臨、そして義認、聖化、栄化の問題が父なる神、子なる神、聖霊を通して説明されていく[10]」と言う。両者ともに問題にしているのは「仰瞻」「キリストを仰ぎ瞻る」という視覚に関わる用語である。本論はこれらの問題についてテクストに即してより詳細に考察するため、神を見ることに関わる以下の三つの聖句を内村がどう解釈しているかを分析する[11]。

幸福なるかな、心の清き者。その人は神を見ん。（マタイ福音書五章八節）

今われらは鏡をもて見るごとく見るところ朧なり。然れど、かの時には顔を對せて相見ん。今わが知るところ全からず、然れど、かの時には我が知られたる如く全く知るべし。（コリント前書一三章一二節）

愛する者よ、我等いま神の子たり、後いかん、未だ顕れず、主の現れたまふ時われら之に肖んことを知る。我らその眞の狀を見るべければなり。（ヨハネ第一書三章二節）

これらの聖句はしばしば密接に関係づけられている。特にマタイ福音書五章八節は、他の二つが再臨運動の少し前の時期から言及が始まるのに対し、初期の頃から山上の垂訓としてしばしば引用されており、解釈を時系列順に分析できる。以下、本論では以上の三つの聖句について時系列に沿ってその意味連関を明らかにしていく。

一　再臨運動以前のマタイ福音書五章八節の解釈

本節では再臨運動期以前[12]のマタイ福音書五章八節の解釈を扱う。初期の内村の解釈は、「心の清き」という前半部が中心になっていることが多い。例えば、一八九九年の「美訓と其註解」[13]では以下のように註解している。

清き心は無慾の心なり、慾は心の目を塞ぐものなり、情慾なり、利慾なり、名誉慾なり、皆信仰の正反対なり、慾の減ずる比例に神は明白に見ゆるなり、神は学識を以て見るを得ず、慾を節してのみ彼は吾人の眼に顕はるゝなり、禁煙禁酒等の利は此に存す、施与慈善の益も此にあり[14]

解釈の中心軸は「心の清き」という前半部にあり、禁酒禁煙や慈善活動といった道徳的な活動が信仰にとって持つ意義が述べられている。終末論とは結びつきは存在しない[15]。

そのような中で一つの転機となったのは一九〇六年の「馬太伝第五章[16]」である。内村はここではマタイ福音書五章三節の後半部「天國はその人のものなり[17]」の解釈で終末論に言及している。

〇「天国」神の国なり、後に事実となりて此世に現はるべき者、然れども今は霊的状態として聖徒の心に存する者なり（中略）〇「有なれば也」今既に其人の有なれば也、キリストの再来と万物の復興とを待つを要せず、天国は今既に心に貧しき者の有なれば也、天国は来世と混同すべからず、来世とは天国が事実となりて後に此世に現はるゝ者を云ふに過ぎず、天国は今既に存す、キリストの霊の灑がるゝ所、聖徒の愛を以て互に相交はる所、是れ天国なり、今は肉眼を以て見る能はざるも、霊覚を以て感じ得る者なり、天国はキリストの降臨と同時に此世に臨めり、而して心を虚うして吾人何人も今日、今、之を吾人の有となすを得るなり[18]。

内村は「天国」と「来世」について、両者ともに神の国だとしつつ、「天国」を「今は霊的状態として聖徒の心に存する者」、「来世」を「天国が事実となりて後に此世に現はるる者」と区別する。前者は「霊」による現在的終末論、後者はキリストの再臨と関係すると考えられる。内村は、後者の存在を否定することはしないが、解釈の中心を、「キリストの再来と万物の復興とを待つを要せず、天国は今既に心に貧しき者の有なれば也」と、「天国」すなわち「霊」による現在的終末論の方に置いている[19]。この現在的終末論の重視は、「心の清き者とは其目的の単純なる

者との意ならざるべからず、天国と其義の外、何物をも求めざらんと欲する者との意ならざるべからず」[20]と、マタイ福音書五章八節の解釈にも反映されている。続く後半部の解釈は、「此単純なる目的ありて、人に多くの欠点と汚穢と存するあるも、彼は徐々に完うせられ且つ潔められて終に神を見るを得るに至るべしとなり」[21]とあるように、聖化と関係づけられている。

内村は、神は「霊」なので神を見るとは、神を肉眼で見ることではなく、「霊と真とを以て」[22]見ることだとする。神を見ることについては、「『見る』とは想像に対して言ふ語なり、明白に会得するの意なり、百聞一見に如かずと言ふが如し、たゞに神を憶想推測するにあらずして、判然と暁得するの意なり」[23]とあるように、「想像」「憶想推測」といった人間の想像力や理性の働きの産出とは対立させつつ、「明白に会得」して「判然と暁得する」ことであるとする。内村はその意義を次のように三つに分類する。

（第一に）その栄の光輝その質の真像なるイエスキリストに於て之を見ることなり（希伯来書一章三節）、キリストを見し者は神を見しなり（約翰伝十四章九節）、人はキリストに由らずして神を見る能ず。（第二に）神に在りて人生と万有とを解し得ることなり、人生の矛盾は大なる調和として了られ、宇宙の現象は愛の行動として解せらるゝに至ることなり。（第三に）神の霊を自己の霊に受けて、父の完全なるが如く自己も完全きことなり[24]

内村はまず神を見ると言っても、神との直接性の成立ではなく、キリストを介した間接性の上に成立すると言い、次にそれが信者の人生観や宇宙観にどのような影響を与えるかを述べ、最後に、「神の霊」を受けることで自己が「完全き」ものになると、聖化について言及する。詳細はこのテクストでは明確でないが、少なくとも神を見ることが、キリストを見ることとされ、さらに信者に完全性をもたらす聖化すなわち救済論的な問題につながるものとして把握されている。

以後、内村のマタイ福音書五章八節の解釈は後半部の解釈の比重が大きくなり、贖罪論的救済論的な意味が付与されていく。例えば、一九一三年の「福音の恩恵的解釈[25]」では、内村は「福音は固と是れ神の恩恵の福音であれば、是れは恩恵的に解釈すべき者であつて律法的に解釈すべき者でない[26]」とし、マタイ福音書五章八節前半部の解釈を道徳的必要性から「鋭き良心[27]」へと変更する。内村によれば、「心の清き」とは「既に清く成りたる心ではない、心の清浄を求めて悶え苦しむ状態[28]」である。罪人である人間が己を清くすることができるはずがなく、せいぜい心の清さを望む「預望的の清浄[29]」に至ることができるだけだからである。したがって、内村は「心の清き」を「『饑え渇く如く義を慕ふ』と云ふと殆んど同意義の言辞[30]」とし、マタイ福音書五章八節をキリストの十字架上の贖罪と結びつける。「汚穢を認むるの心の眼を賜はりしは、是れ軈て之を取除かれて神を其清浄に於て仰ぎ奉るに至るの預兆[31]」なので、心の清い人々が神

を見るに至るのは、「己の汚穢に堪えずして清浄を望んで止まざる者は終に赦罪の福音を齎して世に降りし神の子に由りて父なる神を仰瞻るに至る」[32]とあるように、己の罪から逃れようとして最終的に神に行き着くからだと内村は言う。マタイ福音書五章八節の「神を見る」という言葉が、中沢が指摘した「仰瞻」と結びつき、贖罪論的救済論的な含意を持ち始めている。「仰瞻」との結合は一九一五年に発表された「山上の垂訓の読み方」[33]でも確認できる。

信者に取りては神とは他の者ではない、キリストである、天国とは他の者ではない、キリストである、キリストを見た者は神を見たのである、神を識ること是れ永生である、而して神を識るとはキリストを識ることである、世の罪のために十字架に釘けられしキリストが信者の神であつて又天国である、信者の最上の幸福は彼れキリストを己が救主として仰ぎ瞻ることである[34]

「神を見る」「キリストを見る」「神を識る」「キリストを識る」が同じこととされ、さらに「永生」「天国」とされている。「キリストを見る」ことは「神を識る」ことであり、それがそのまま「永生」「天国」である。引用の後半では「キリストを見る」ことがキリストの十字架上の贖罪に結びつけられ、「キリストを己が救主として仰ぎ瞻ること」すなわち「仰瞻」が「信者の最上の幸福」だとされる。「神を見る」ことが贖罪論的救済論的な含意をもって使われている。その上でマタイ福音書五章八節の解釈が行われている。内村はまず、前半部を「正直にして偽はらざる者、罪は罪として認め、不義は不義として告白し、直道を歩むを以て何よりも幸福なりと做す者は福ひなり」[35]と解釈する。これは心の清さを実際の清さではなく自分の罪を認める心と解釈している点で前述の「福音の恩恵的解釈」と同じである。後半部は「其人はキリストに在りて神を見ることを得べければ也、自己の不浄を覚認するの結果、終に神の備へ給へし義また聖なるキリストを仰ぎ瞻ることを得べければ也」[36]と解釈される。「神を見る」ことがキリストの贖罪と結合し、救済論的な意義をもつ「仰瞻」[37]と結びついている点は上述の「福音の恩恵的解釈」と同じだが、一つだけ異なっているのは「聖なるキリスト」というモチーフが登場したことである。ここでは明白には述べられてはいないが、贖罪に加えて聖化もまたマタイ福音書五章八節の解釈の射程に入っているのである。

二　再臨運動期以後の解釈

本節では再臨運動期以後のマタイ福音書五章八節の解釈を扱うが、コリント前書一三章一二節とヨハネ第一書三章二節の解釈も補助的に考察する。なぜなら、この時期からマタイ福音書五章八節との密接な関係が始まるからである。[38]以下、時系列順にこれらの解釈を見ていく。まずは一九一六年の「聖書の読方来世を背景として読むべし」[39]を扱う。このテクストは副題にも

あるように、「来世」を背景として聖書解釈を行うことを主張し、「聖書は旧約と新約とに分れて神の約束の書である、而して神の約束は主として来世に係はる約束である」[40]と、「来世」に関する「神の約束」すなわちキリストの再臨を全面に打ち出している。ここで扱われる山上の垂訓についても「人はイエスの山上の垂訓を称して『人類の有する最高道徳』と云ふも、然し是れとても亦、来世の約束を離れたる道徳ではない、永遠の来世を背景として見るにあらざれば垂訓の高さと深さとを明確に看取することは出来ない」[41]とされている。

では、マタイ福音書五章八節はどう解釈されているのか。この聖句はコリント前書一三章一二節と結びつけられている。コリント前書一三章一二節が聖書解釈の際に使われるのは、管見の限り、このテクストが最初である。内村はまず「神を見る」ことについて場所と時とを問う。

何処でかと云ふに、勿論現世ではない、『我等今(現世に於て)鏡をもて見る如く昏然なり、然れど彼の時(キリストの国の顕はれん時)には面を対せて相見ん、我れ今知ること全からず、然れど彼の時には我れ知らるゝ如く我れ知らん』とパウロは曰ふた(哥林多前書十三の十二)、清き人は其の時に神を見ることが出来るのである[42]

コリント前書一三章一二節が引用されることで「神を見る」ことがキリストの再臨と結びつき、現在から将来に移されている。むろん、「多分万物の造主なる霊の神を見るのではあるまい、其の栄の光輝その質の真像なる人なるキリストイエスを見るのであろう」[43]と、従来の解釈も部分的に保存されてはいるが、「心の清き者(彼に心を清められし者)は天に挙げられしが如くに再地に臨り給ふ聖子を見て聖父を拝し奉るのであろう」[44]と、そこに再臨という新たなモチーフが導入されているのである。

さらにコリント前書一三章一二節によって新しい別のモチーフも現れることになる。これは一九一八年の「七福の解」[45]に登場する。内村は山上の垂訓について「上段は信者の描写であつて、下段は天国の記述である」[46]とした上で、マタイ福音書五章八節の後半部から天国について「第六に神の聖顔を拝することの能る所」[47]と述べている。「神を見る」ということが「神の聖顔を拝すること」とされ、「神の聖顔」という新たなモチーフが登場してきている。このテクスト中にコリント前書一三章一二節からの引用は存在しないが、「神の聖顔を拝する」という「天国」の状態に関する叙述の中に「彼の時には面を対せて相見ん」というコリント前書一三章一二節の残響を聞き取ることができるであろう[48]。キリストの再臨の際にこのような「天国」が実現するのである[49]。

では、再臨との関連で言及される神の顔というモチーフは、どのような意義をもつのであろうか。コリント前書一三章一二節は内村全集の他の場所では、ヨハネ第一書三章二節の解釈のなかに登場している。これは元々信者の復活における身体のあり方に関する文脈で使用されていた聖句である[50]。ヨハネ第一書

三章二節は内村においては再臨運動期以前から再臨に結びついている聖句であった。では、コリント前書一三章一二節との結合はどのような解釈を生み出したのか。

これら二つの聖句が同時に登場するのは一九一七年に発表された「約翰第一書三章一―三節研究」[51]が最初である。内村がこのテクストで扱うのは信者の聖化の問題である。

信者は今既に神の種を心に播かれし者、神の子として取扱はるゝ者である、然し未だ神に肖て完全なる者ではない、『天に在す汝等の父が完全きが如く汝等も完全くすべし』と教へられて完全は彼の追求すべき者であるが然し彼は既に之に達したる者ではない（馬太伝五章四八節）父の子であつて未だ父に肖ない者である、信者の苦痛は茲に在る、彼の実際は彼の理想に副はない、彼は罪より救はれて今猶ほ罪を犯す者である[52]

キリスト者は今現在において既に神の子とされているが、まだ完成はしていない。神の子である以上は、完全である神に「肖」て完全でなくてはならないが、実際は神には全く「肖」ておらず、「今猶ほ罪を犯す者」である。キリスト者が既に救われたというのは「希望に由りて救はれた」[53]のであって、「救拯の希望を授けられた」[54]という意味で救われたのである。したがって、実際には「父の子であつて未だ父に肖ない者」「罪より救はれて今猶ほ罪を犯す者」であって、希望への憧れと理想の追求に苦しまなくてはならない。ここに「罪」という言葉が出てきていることからも分かるように、「神に肖る」ことは贖罪論の文脈で考えられ、聖化の問題へとつながっている。完全な意味での聖化が実現するのはキリスト再臨の時だとされる。

主が再び顕はれ給はん時には、彼は必ず神に肖る者と成るのである、其時宇宙は一変し、万物は改造され、新らしき天と新らしき地とは現はれ、彼も亦壊ざる体を与へられて、茲に彼の救拯は完成うせられて、彼は父の完全きが如く完全くなることが出来るのである、信者は今猶ほ救拯の途中に於て在るのである、神は彼に在りて善工を始め給うて之をイエスキリストの日に於て完全うし給う[55]

キリストが再臨する時にこそ、キリスト者は神に肖ることができ、完全な神のように完全になることができる。それまでは「救拯の途中」にある。完全性の実現という点で、ここでは再臨が贖罪の延長線上で考えられていると言えよう。再臨と贖罪とは、完全性の実現という目的に向けられたプロセスによってつながっている。では、なぜ再臨時に信者の救済は完成するのか。

彼は神を再顕せるキリストに於て其真の状に於て拝するこが出来るからである、我等が今此世に於て完全なる能はざる理由は一にして足らずと雖も、其一は確かに神を真の状に於て拝することの能ざる事であるは明かである、「我等今鏡をもて見る如く朧なり」である（コリント前十三章十二）我等は今遠くより遥かに神を拝し奉るのである、循つて彼を見ること朧に、又彼に倣ふこと微なるのである、

然れども「彼の時には面を対せて相見ん」とある（同節）と約翰書の此所に「その真状を見るべし」とあると同じ意義である、神の栄の光輝その質の真像なるキリストと面を対はして相見るを得て我等も終に彼に肖ざらんと欲するも能はないのである[58]

キリストが再臨する時に信者の救済が完成するのは「神の顔を見る」からである。再臨時に初めて神を「其真の状に於て拝することが出来」て神に肖ることができるからであり、この聖句がコリント前書一三章一二節の「面を対せて相見ん」と同義だとされている。「神の顔を見る」ことでもって、信者の救済の完成と再臨とが結びついている。さらに、現在と将来との関係についても言及がなされている。内村によれば、今現在でも「神の顔」は見ることができるが、鏡を介したかのように「朧」であり、いわば遠くから見ている状態である。むろん、それでもある程度の救済の効果を発揮する。「今や神をその真状に於て見ることは出来ない、此地にありて遠くより之を望むのである、然れども聖き彼を望むこと其事が大なる聖めの能力である、此能力を称して来世の権能といふ（希伯来書六章五節を見よ）、来世を望むことが信者日常の生涯に及ぼす感化力をいふのである、此希望を懐いて信者は世に倣はんと欲するも能はないのである[59]」とある通りである。しかし、これはあくまで救済の希望に基づくものであって、救済の完成ではない。終末の到来していない現在においてできるのは「我等今キリストに就て読み且つ聞く、我等は彼に関する理想を脳裡に画き偏に之を実現せんと努む[60]」ことだが、しかし「想像は朧にして其実現は朦朧たらざるを得ない[61]」のであり、完全なものにはなりえない。したがって、救済の完成はやはりキリストの再臨する終末の時であり、「彼が顕はれ給はん時には、我等彼の真状を拝するを得て、印象は深く我等の心に彫まれ、循て我等の身を以てする其模倣は鮮明ならざるを得ない[62]」のである。神の顔を面と向かって見る結果、「キリストをその真状に於て拝し奉る其結果は直に我等の全性に及び、我等も又自から其状に化せられ其同じ象に肖るに至るのである[63]」とあるように、信者の完全性と救済の完成とが実現し、「神に肖る」ことができる。ここから内村が現在的終末論と再臨との関係を、神の顔の明瞭度の違いとして把握していたことが分かる。今現在においても神の顔はおぼろげながら見えているので一定の聖化が実現するが、それが完成するのは「面と面とを対して」神を見る再臨の時なのである[64]。

以上の議論は別のテクストでも確認できる。例えば、一九一八年の「見神の恩恵[65]」では内村は再度ヨハネ第一書三章二節を解釈し、上記のモチーフを反復している。

鏡に照らして見るが如くに朦朧に彼を見るに非ずして面を対して相見るを得るが故に我らの心も亦彼が潔くあるが如くに潔くなるを得るのである、我が霊に於て彼に肖ることを得、亦我が体に於て彼に肖ることを得るのである、今や心に於て彼を念じ霊に於て彼と交はるに止まると雖も彼れ

露はれ給はん其時には友が友と面を対して語るが如く相共に語るを得るのである、あゝ如何なる時ぞ、我らの救の完成うせらるゝ時は其時である[64]

「神の顔を見る」ことが聖化や「救の完成」だとされ、現在の「霊」による交わりと将来の再臨との関係が神の顔の明瞭度の違いとして説明されている。内村は「昇天せるキリストに肖る事、其事が聖書の教ふる救である[65]」と断言し、「見ることは肖るために必要である、信ずる丈けでは足りない、百聞は一見に如かずである、主を見奉るを得て始めて彼の弟子たるの実を現はし得るに至る[66]」とあるように、現在の「信」に加えて「見神」の必要を説く。「神の顔を見る」ことが「神に肖る」ことになり、聖化と救済の完成となる。したがって救済の完成のためには「見神の恩恵[67]」が必要不可欠な条件となる。しかし、現在の「信」の状態では「我ら今は主より離れて居り、聖書に於て彼に就て読み、信仰の師より彼に就て聞く[68]」ことができるだけで、「常に靴を隔てゝ痒を掻くの感なくんばあらず[69]」である。「我らの信仰如何に強くあるとも信は信にして見ではない[70]」のであり、「信は信者が地上に寄宿れる間の見の代用に過ぎない[71]」のである。

信は暗夜に於ける灯火の如き者である、其用甚だ大なりと雖も日光の輝々たるには遥に及ばないのである、而して義の大陽の昇る時に信は見に化するのである、シュラムの女は其恋人に会ふと彼の跡を逐ふの用なきに至るのである(雅歌)、主を其真の状に於て見奉る事、其事は信者の歓喜の極である[72]

神の顔の明瞭度の、現在と将来における差異が「灯火」と「大陽」との比喩によって説明されている。「灯火」にも一定の意義が付与されてはいるが、「義の大陽」とは比べものにならず、その時に「信は見に化する」のであり、聖化と救済とが完成する。かくして、内村は「神に此約束あり信者に此希望ありて人世は涙の谷に非ず、又死は幽暗に入るの門に非ずである[73]」と述べてこのテクストを終えている。

三　晩年の解釈と到達点

では、コリント前書一三章一二節とヨハネ第一書三章二節によってもたらされた「神の顔を見る」というモチーフはマタイ福音書五章八節の解釈に最終的にどのような変化をもたらしたのか。一九二二年の『キリスト伝研究（ガリラヤの道）』の山上の垂訓の解釈においては三つの聖句すべてが登場する。本節では最後にこのテクストを扱う。

内村は山上の垂訓を天国の福音と規定し、「祝福は実現したのではない。預言され約束されたのである[74]」と、神の約束という基礎の上におき、「天国」を次のように説明する。

『天国』は神が人に与へ給ふ幸福の全体である。其半面は心の状態であり、他の半面は境遇の実現である。天国は完成されたる霊魂と完成されたる宇宙とより成る。故に天国は

今既に在る者であつて、又後に現はるべき者である。[76]

内村は「天国」を現在と将来との双方から規定する。一方で「天国」は「今既に在る者」として今現在において経験されうるものだが、他方で、それは天国のすべてではなく、将来、「未来に於ける神の国の実現」[77]によって「後に現はるべき者」としてもたらされる。現在的終末論とキリスト再臨とがともに保存されている。これは義の議論でも展開される。

義に飽く途に二つある。其第一は義とせらるゝ事、即ち義人ならざるに義人として認めらるゝ事である。其第二は実質的に義たらしめらるゝ事である。第一は罪の此世に於て、罪の身此儘にて、信仰の故に由りて、義とせらるゝ事である。第二は信仰の結果として栄化復活の恩恵に与り、神の子キリストが完全きが如く完全くせらるゝ事である。第一は現世の事であり、第二は来世の事である。そして神の為し給ふ事なるが故に二者何れも確実なる事である。[78]

内村は義認と完全性の実現とを区別し、前者を「現世の事」に、後者を「来世の事」に帰す。「信者は今世に於て信仰的に義とせられて、来世に於て事実的に義とせらるゝのである」[79]とあるように、救済の過程がいわば現世における義認と来世における聖化との二段階になっている。贖罪信仰が前者の義認をもたらし、「我が罪を十字架に釘け給ひしキリストを仰瞻る事に由りて、彼の義を我が義となす事が出来る」[80]とされる。十字架上のキリストの「仰瞻」によって贖罪信仰に至り、義認は達成される。しかし、内村は「信仰に由る義は完成せられたる義ではない」[81]として第二の段階の必要を訴える。

『愛する者よ我等今神の子たり、後いかん未だ露はれず、彼れ顕はれん時には必ず神に肖んことを知る』とある（ヨハネ第一書三章二節）。信者の義は未だ完うせられたのではない。之はキリストの再臨を待つて全うせらるゝのである。[82]

ヨハネ第一書三章二節が登場し、第二段階がキリスト再臨に結びつけられている。聖化と完全性はキリストの再臨をもって完全に実現する。内村はこの解釈の上でマタイ福音書五章八節の解釈に入っていく。

内村はマタイ福音書五章八節の前半部については「『心の清き者』とは心に偽はりなき者である」「『正直者』[83]と規定し、後半部については以下のように言う。

『神を見る』とは現世に在りてはイエスキリストの面にある神の栄光を拝する事である（コリント後書四章六節）。其結果として来世に在りては面前再臨のキリストに接する事である。『彼の時には面を対せて相見ん』とあるが如し（同前書十三章十二）。所謂『見神』と称へて漠然として神を冥想する事ではない。歴史的イエスに師事することゝ、再び顕はれ給ふ彼に主として事ふることである。[84]

短い文章だが、内容的に注意すべき箇所である。「神を見る」ことが現世と来世とで二つにされ、両者共に「面」と連関しつつ、「其結果」という言葉でつなげられている。現世の場合は「イ

エスキリストの面にある神の栄光を拝する事」であり、来世の場合は「面前再臨のキリストに接する事」であって、コリント前書一三章一二節が引用されている。両者の関係については内村が「其結果」という一言で済ませているので判然としないが、コリント前書一三章一二節の引用を根拠に前節での議論を適用するなら、現在の「霊」による交わりと将来の再臨との神の顔の明瞭度の違いとして考えられる。現世でも来世でも、キリストの顔を見ることは神を見ることであり、救済や永生に直結している。しかし、現世の場合、鏡を通してみるかのように朧であり、キリストを見ることによる救済は一定の程度まではいくが、完成はしない。キリストの再臨をもって初めてキリストの顔を完全に見ることができ、キリスト者が神に「肖」るに至って救済は完成する。内村はこれを「其結果」という一言でもって語っていると考えられる。次の文で内村は、自分の「神を見る」という議論を「所謂『見神』」[85]すなわち「漠然として神を冥想する事」とは区別し、「歴史的イエスに師事することと、再び顕はれ給ふ彼に主として事ふること」だとしているが、これは内村が「瞑想」による神秘的な直観や「見神」を否定すると同時に、歴史上に現れたイエスと再臨時に再び顕れるキリストとを見ることは肯定していたことを示している。ここで言われている「歴史的イエス」が何を意味しているかは判然としないが、今までの議論を根拠に推測するなら、十字架上のイエス・キリストのことであろう。十字架上のイエス・キリストの「仰瞻」によって、内村は贖罪信仰を得ることができた。内村にとって、「見神」とは、神秘的な直観ではなく、あくまで歴史上に現れた十字架上のイエス・キリストの顔の「仰瞻」であり、再臨したイエス・キリストの顔を「面と面とを対して」見た時における救済の完成へとつながっていくものであった。両者をつないでいたのは、現在と将来との神の顔の明瞭度の違いであり、マタイ福音書五章八節とコリント前書一三章一二節とヨハネ第一書三章二節とが密接に結びつくことによって示されているのである。

以上の議論は次のようにまとめることができるだろう。内村においてマタイ福音書五章八節は当初、「心の清き」という前半部に重点が置かれ、道徳という観点から解釈されていたが、やがて現在的終末論の観点から後半部の「神を見る」が聖化や完全性といった贖罪論的救済論的な問題として解釈されるようになった。再臨運動直前期になると、コリント前書一三章一二節やヨハネ第一書三章二節が結びつくようになり、解釈の観点が現在的終末論から再臨に移行し、「神の顔を見る」というモチーフも加わった。この「神の顔を見る」というモチーフが付け加わったことで、現在と将来との神の顔の明瞭度の違いという考えが登場し、最終的に現在的終末論と再臨、贖罪と聖化とをつなぐに至ったのである。

かくして、先行研究において贖罪と聖化とをつなぐとされた「仰瞻」概念の問題が「神の顔を見る」という形で先鋭化された。

今後はこの問いに対してさらなる追究を行う予定である。

註

(1) 中沢洽樹「仰瞻のキリスト論――覚え書」『内村鑑三研究』七号、一九七六年、一―一三頁。

(2) 李慶愛『内村鑑三のキリスト教思想　贖罪論と終末論を中心として』九州大学出版会、二〇〇三年。

(3) 中沢洽樹「仰瞻のキリスト論――覚え書」『内村鑑三研究』七号、一九七六年、九頁。

(4) 中沢、前掲書、一〇頁。

(5) 中沢、前掲書、一一頁。

(6) 李慶愛『内村鑑三のキリスト教思想　贖罪論と終末論を中心として』九州大学出版会、二〇〇三年、二〇五頁。

(7) 李、前掲書、一八〇頁。

(8) 李、前掲書、二〇五頁。

(9) 『内村鑑三全集二六』、三〇四頁。『内村鑑三全集』は一九八〇―一九八四年、岩波書店刊。以下、『全集』と表記する。なお、『内村鑑三全集』には○や△、傍点といった様々な記号が付されているが、本論ではそれも可能な限り忠実に引用した。『全集』から引用されたルビのうち、通常のものは「聖書之研究」等の原典から付されているものであり、〔　〕に入ったルビは全集編集者によって付されたものである。

(10) 李慶愛『内村鑑三のキリスト教思想　贖罪論と終末論を中心として』九州大学出版会、二〇〇三年、二〇五頁。

(11) 聖書の引用は大正改訳による。

(12) ここで再臨運動以前としたのは、内村がマタイ福音書五章八節の解釈をコリント前書一三章一二節やヨハネ第一書三章二節と結びつけるようになる一九一六年までである。再臨運動自体は一九一八年に始まるが、そこに至るプロセスがもっと以前から始まっていることは先行研究でしばしば言及されることであり、本節ではその途中である一九一六年までの時期を扱う。なお、内村の伝記的事実に照らしても、一九一六年は内村が再臨信仰を獲得する上で重要な一契機となった『サンデー・スクール・タイムズ』の一九一六年六月、二四号に掲載されている C. G. Trumbull の記事 "Is the Truth of Our Lord's Return a Practical Matter for To-Day?" を内村が読んだ年であり、この年を一つの境とすることは十分に可能である。内村の伝記的事実に関しては、鈴木範久『内村鑑三日録9　現世と来世』教文館、一九九六年と『内村鑑三日録10　再臨運動』教文館、一九九七年とをそれぞれ参照。

(13) 一八九九年五月五日の『東京独立雑誌』三〇号、「講壇」欄に掲載。署名「内村鑑三」。なお、内村の主筆誌における聖書の「註解」はこれが最初である。『全集七』、六二頁以下を参照。

(14) 『全集七』、六四頁。

(15) 一九〇一年の「我主耶蘇基督」（一九〇一年十一月二十日の『聖書之研究』一五号より一九〇二年七月二十日の二三号にいたる「所感」欄に連載。署名は「内村鑑三」だが、「(三)」「(四)」には署名なし）において山上の垂訓を扱う際に来世に関する言及はあるが、それは来世の存在を確実な事実とした上で、「イエスは未来を熟知し給へり、彼は吾人が明日あるを知るが如くに来世あるを知り給へり、故に吾人が明日の計をなすが如くに来世の計をなすべきことを吾人に教へ給へり」（『全集九』、四四〇頁）とあるように、現在の人間の知を未来にまで伸張したものとされ、再臨という観点からの把握はされていない。マタイ福音書五章八節も引用のみで、解釈はない。『全集九』、三九一頁以下を参照。

(16) 一九〇六年十一月十日、十二月十日、一九〇七年一月十日の『聖書之研究』八一、八二、八三号の「研究」欄に「(一)」「(二)」「(三)」として連載された。署名「内村鑑三」。『全集一四』、三二四頁以下を参照。

(17) 引用は大正改訳によった。

(18) 『全集一四』、三二六頁。

(19) もっとも、内村がこのテクストでは現在的終末論の方を重視しているということであり、キリストの再臨を自分の思想から切り捨てているということではない。

(20) 『全集一四』、三三〇頁。

(21) 前掲書、三三〇頁。

(22) 前掲書、三三〇頁。

(23) 前掲書、三三一頁。

(24) 前掲書、三三〇—三三一頁。

(25) 一九一三年一月十五日の『聖書之研究』一五〇号に掲載。署名「内村鑑三」。『全集一九』、三三〇頁以下を参照。

(26) 『全集一九』、三三〇頁。

(27) 前掲書、三三二頁。

(28) 前掲書、三三二頁。

(29) 前掲書、三三二頁。

(30) 前掲書、三三二頁。

(31) 前掲書、三三二頁。

(32) 前掲書、三三二頁。

(33) 一九一五年十月十日の『聖書之研究』一八三号に掲載された六篇よりなる短文のテクスト群の一つ。署名はなし。『全集二一』、四五八—四五九頁。

(34) 『全集二一』、四五八頁。

(35) 前掲書、四五八頁。

(36) 前掲書、四五八—四五九頁。

(37) ここでは「仰瞻」は名詞ではなく、「仰ぎ瞻る」という動詞である。この点については中沢洽樹も『「仰瞻」と名詞形で使われる場合は少なく、ほとんど動詞形」だと指摘し、それを内村の信仰の動的な性格を表すものだとして「非完

結的、進行形のキリスト論」と述べている。中沢洽樹「仰瞻のキリスト論――覚え書」『内村鑑三研究』七号、一九七六年、特に一二頁を参照。

(38) 特に、コリント前書一三章一二節への本格的な言及が始まるのはこの時期からである。管見の限り、コリント前書一三章一二節に対するこの時期以前の言及は、一九〇五年に発表された「世界最大の言辞　約翰伝第一章第一節の黙考」（一九〇五年四月二十日の『聖書之研究』六三号、「説話」欄に掲載。署名「内村鑑三」。『全集一三』、一三五頁以下）というテクストのみである。これはしかし、コリント前書一三章一二節の解釈ではない。ヨハネ福音書一章一節で使われている προς というギリシア語の用例として引用されているだけである。『全集一三』、一三八頁。

(39) 一九一六年十一月十日の『聖書之研究』一九六号に掲載。署名は「内村鑑三」。後に『研究第二之十年』に再録された。同年十月十五日に栃木県の氏家在狭間田（現塩谷郡氏家町狭間田）の青木義雄宅で開かれた聖書研究会での講演の草稿である。『全集二三』、一二頁以下を参照。

(40) 『全集二三』、一二頁。

(41) 前掲書、一二頁。

(42) 前掲書、一三―一四頁。

(43) 前掲書、一四頁。

(44) 前掲書、一四頁。

(45) 一九一八年三月十日の『聖書之研究』二一二号に掲載。署名「内村鑑三」。後に『基督再臨問題講演集』に再録されている。『全集二四』、八五頁以下を参照。

(46) 『全集二四』、八六頁。

(47) 前掲書、八六頁。

(48) ここではコリント前書一三章一二節の引用はないが、その代わりにヨハネ黙示録二二章三、四節「その僕らは之に事へ、且その御顔を見ん、その御名は彼らの額にあるべし」（文語訳）が引用され、これが「真の見神」（『全集二四』、八七頁）とされている。したがって、ここで言われている「神の聖顔を拝する」とはヨハネ黙示録二二章三、四節に由来するのかもしれない。しかし、基本的なモチーフはコリント前書一三章一二節にも共通するものである。

(49) 注目すべきことは「天国」の概念の理解に変更が加えられていることである。先述した「馬太伝第五章」では、「天国」は「霊」による現在的終末論として解釈され、将来の「来世」とは区別されていたが、ここでは「天国は単に霊的状態ではない、地に建設せらるる国である」（『全集二四』、八六頁）とされ、「来世」と入れ替わる形で解釈が変更されている。なぜ、このような解釈の変更が生じたかは今後の課題としたい。

(50) 例えば、「保羅の復活論（哥林多前書第十五章と其略註）」（一九〇五年六月十日の『新希望』六四号、七月十日の『新

希望』六五号の二回に連載。いずれも「智識」欄に掲載された。署名「内村鑑三」。後の一九〇七年九月十八日に『保羅の復活論』という題名で一冊にまとめられて聖書研究社から刊行された）を参照。『全集一三』、一六五頁以下に収録。管見の限り、ヨハネ第一書三章二節が登場する最初のテクストである。『全集一三』、一八一頁を参照。

(51) 一九一七年一月十日の『聖書之研究』一九八号に掲載。署名「内村鑑三」。後に『研究第二之十年』に再録された。副題には括弧つきで「京都会合に於ける第一回講演大意」と述べられているが、この講演は一九一六年十一月十二日に京都市上京区室町通中長者町の佐伯理一郎宅で開かれた「聖書之研究」読者会での講演のことである。『全集一三』、六二頁以下を参照。

(52) 『全集一三』、六五頁。

(53) 前掲書、六五頁。

(54) 前掲書、六五頁。

(55) 前掲書、六五頁。

(56) 前掲書、六六頁。

(57) 前掲書、六八―六九頁。

(58) 前掲書、六六頁。

(59) 前掲書、六六頁。

(60) 前掲書、六六―六七頁。

(61) 前掲書、六七頁。

(62) 注意すべきことは二点ある。まず「神を見る」ことが、「我等の身を以てする其模倣」「彼に倣ふこと」といった表現にもうかがえるように、「神に倣う」ことと関係づけられていることである。内村は救済には実行の面も伴うと考えていた。次に、内村は「神を見る」ことを創造論と結びつけ、「造化の終極が茲に到らずして造化は失敗であつたと言はざるを得ない、キリストの救拯も亦茲に到らずして救拯は失敗であつたと言はざるを得ない」（『全集一三』、六七頁）と述べている。これらは今後の課題としたい。

(63) 一九一八年三月十日の『聖書之研究』二一二号に掲載。署名は「内村鑑三」。『全集一四』、八二頁以下を参照。

(64) 『全集一四』、八三頁。

(65) 前掲書、八四頁。

(66) 前掲書、八四頁。

(67) 前掲書、八四頁。

(68) 前掲書、八四頁。

(69) 前掲書、八四頁。

(70) 前掲書、八四頁。

(71) 前掲書、八四頁。

(72) 前掲書、八四頁。

(73) 前掲書、八四頁。

(74) 一九二二年の『キリスト伝研究（ガリラヤの道）』という長文のテクストではこの三つの聖句が登場してきている。

なお、このテクストは一九二二年十二月十日から一九二三年十月十日、一九二四年四月十日から六月十日、および、九月十日、十月十日にかけて『聖書之研究』の二六九―二七九号、二八五―二八七号、および二九〇、二九一号において十六回にわたって掲載された。署名「内村鑑三」。ここでは第十五回から第十八回、全集でいうと『全集二七』、三一四頁から三二九頁までを扱う。

(75) 『全集二七』、三一八頁。

(76) 前掲書　三一八―三一九頁。

(77) 前掲書、三一九頁。

(78) 前掲書、三二三頁。

(79) 前掲書、三二三頁。

(80) 前掲書、三二三頁。

(81) 前掲書、三二三頁。

(82) 前掲書、三二三頁。

(83) 前掲書、三二六頁。

(84) 前掲書、三二六頁。

(85) この表現だけ見ると、前節の「見神の恩恵」の議論と矛盾するが、「所謂」という表現がポイントとなる。おそらく、内村がここで言っているのは、前節の「神の顔を見る」ことではなく、綱島梁川を初めとする当時の「見神」体験の主張者のことであり、綱島らを間接的に批判しているのではないか。内村と綱島と比較研究については、柴田真希都「見神と自然をめぐる思索と交錯――綱島梁川と内村鑑三――」『宗教研究』八五巻、第一輯、二〇一一年、一二五―一四九頁を参照。